

♪コンサート・クローズアップ♪

第30回

ピティナ・ピアノコンペティション

王子賞受賞者披露演奏会



(後列左から) 鈴木美祐、水谷桃子、恩田佳奈
(前列) 前山仁美



前山仁美



水谷桃子



恩田佳奈



鈴木美祐

水谷桃子の弾くりスト「パガニーニ大練習曲」は粗さが隠見したものの音楽の作りの大きさが将来性を兆す。仕上げの美麗さに捉われて小奇麗にまとまってほしくない人材だ。フランク「前奏曲、コラールとフリーガ」の鈴木美祐は、その柔らかい音楽性に合致した選曲に主知性をうかがわせる。散文的ともいえる楽曲を刹那的に扱わずにひとつの流れとして集約させ得た。

スカルラッティのソナタと併せてバッハ「ブゾーニのシャコンヌ」を選んだのは恩田佳奈。まず技巧が誇大視されがちなこの曲が、やはりバッハの精神を汲んで編曲がなされたとの再認識を促すような演奏。しかし20代前半とはこれほどにも気負いがないものだったろうか？ 前山仁美によるハイドン「アンダンテと変奏曲」とラフマニノフ「楽興の時」では楽曲への共鳴による澄んだ表現が認められたが、各曲に更に異なる照射を望んでしまうのは、それを成し遂げられるだけの可能性をそこに見出したからに他ならない。(2月11日、王子ホール)

(木村貴紀)